

第52回造本装幀コンクール 受賞者インタビュー

経済産業大臣賞

「村上善男 玄々とした精神の深みに」

印刷会社：

大和田 克紀氏（秋田活版印刷）

経済産業大臣賞

『村上善男—玄々とした精神の深みに』

出版社／玄風舎
東京大学総合研究博物館
「インターメディアテク」
装幀者／西野嘉章・山本浩貴
印刷会社／秋田活版印刷株式会社
製本会社／南篠原紙工



●御社の活動について教えてください。

基本的には「総合印刷」ですが、デジタル化・オンライン化の時流に沿って、「刷る」ことから「創る」ことへの意識改革と意識高揚で、紙媒体のみならずCDやDVDといった電子メディアの取り扱いと取り組み、そしてWEBソリューションの提供で「刷らない」コンテンツも営業範囲として活動しています。

機器より発想、ハードよりソフト的な意識で取り扱いの Kategorii の増幅と対応の柔軟さを心がけております。

●今回の作品のような造本（天地・小口が白と黒の2パターン、重量を軽くして手にやさしい造り、ページの開きのよさ、など）にされたのは、どういった経緯があったのでしょうか。

当初、並製本での刊行の予定での制作進行でしたが著者であり装幀者である西野先生の編集された「本文」は、それ自体が魅力的であり、それに負けない、活かす表紙デザインはもとより装幀工夫が進んで行き、制作進行しながらの進路変更と調整でした。

もともと著者西野先生は、画一的なありきたりの正攻



秋田活版印刷本社

法の（それはそれで素晴らしいことですが）組版や造本ではなく、個性的で魅力的な、つまり出版本の形態自体が作品として考えておられるので、出版を重ねられても同じものは無い、という発進でした。

今回の作品は、拡販の目的はなく、恩師である「村上善男」先生への尊敬と感謝の思いからの刊行でしたので様々な「制約」を出来る限り取り払いつつ成果に向けて走り出したという経緯です。

西野先生は、若い頃から研究の中で西洋誌を数多く経験されていらっしゃるの、かさ厚で普通の用紙、昔でいうガリ版刷りの「西洋紙」的なものを好まれ、用紙が経年劣化することさえ作品の成果の一部と考えられるので、普通で有りながら唯一無二的な造本に向かいました。

当初本文に関しては小口側もデザインということで、モノクロ本編とカラーで紹介する書簡のページを巧みに交互に交えてデザイン化されました。

それ自体もユニークな発想であるのですが、最終的にはコバを黒塗りすることで、その小口面が埋没するのも惜しいということで、この点は私の方から二種の成果品にさせて頂きました。

結果的に本編は同じものの、二つの顔が出来上がった次第です。

「開きやすさ」に関しては、読みたいときに（見たいときに）読みたいところを見えれば良い、という西野先生の潜在的な考えがあるかもしれません。私自身、西野先生との本作りの中で、しおりやスピンのある刊行物がないのがそれをあらわしているのかもしれない。

●今回御社から当コンクールにご応募いただきましたが、応募したきっかけや、受賞の知らせの感想、周囲の関係者などから反応など、いかがでしたでしょうか。

著者の西野先生と試行錯誤を繰り返し、時間を掛けて制作したので、せっかくなので「造本・装幀」のコンクールへ、ということで出品いたしました。

受賞の報を受けて、またそれが三賞ということで正直望外の嬉しさがありました。

出品自体今回が初めてだったので、業界で認められた感が大きかったです。

●審査会では、装幀・デザインもさることながら、とくに印刷・製本の技術の高さに評価が集中しましたが

（「経済産業大臣賞」は特に印刷・製本技術の高いものが選ばれる）、「背の開きのよさ」、「背にも黒が塗られていて、それがノドににじんで？そこに白い糸が映えているのが、狙ったものなのかどうかはわからないが、それがよい。」などのコメントがありましたが、作品制作において、そうした意図やこだわった点、苦労した点などを教えてください。また、そのほかに制作についてのエピソードがあれば教えてください。

時代はいま電子出版の波に入っています。マンガや小説といった「デジタルコンテンツ」は有償か無償かはともかく、ひろく手軽に読める時代ですが、このデジタルで表現できない部分が「造本・装幀」と考えます。

それがデジタルでは出来なくて、アナログでは可能な部分で、そこが魅了の部分だとも考えます。

コバのにじみの点は、制作を進めた上での最後に湧いた西野先生のアイデアです。

製本が終わったあとの処理なので、必然的に手作業つまり人為的な技術を介するので、また前提としていなかった作業なので、「シミやにじみ」は想定の上で処理を進めましたので、そのにじみすら同じものはない唯一無二感に結果的になりました。

これもデジタルではない、アナログだから可能にする緩さぬくもりさだと思います。

秋田活版印刷が手掛けた、著者西野氏の作品



●一般の方には「造本」という言葉になじみがないかもしれませんが、本の内容だけではなく、「“造本”の観点から、本をこうした視点で見てもおもしろいよ」というポイントがあったら教えてください。

また、電子書籍が広がる中で、紙の本への思いや良さなど、お聞かせください。

デジタル書籍で表現できない部分が「印刷物」で表現できることとして、2Dでは出来ない擬似的3Dでは無い立体感、それに用紙種別による手触りという感触、またインクの匂い（香り）が、より有機的な優しさと安心感を醸し出してくれていると感じます。（了）